2012年 5月25日
第14号

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 14号

もくじ

栗駒山麓から全国の皆様へ　7月7日の交流会にお越し下さい　☆菅原俊文 …… 2

特集**『縄文柴犬ノート』を読んで**　☆尾暮正義 …… 4

シバの散歩道-(14) JSRC理事　根深　誠(文筆家・釣り師・元登山家) …… 6

思い出の犬たち-12　☆柴犬研究所 五味 …… 9

お便りコーナー☆長野県・肥田さん　☆北海道・越田さん …… 10
☆富山県・竹内さん …… 11
☆石川県・黒梅さん …… 12
☆岩手県・菅野さん …… 13
☆長野県・竹村さん　☆大阪府・有藤さん …… 14

新刊紹介**『縄文柴犬ノート』　推薦文**:JSRC理事☆藤井忠志(本州産クマゲラ研究会代表
岩手県立博物館学芸第一課長) …… 15
『北東北 ほろ酔い 渓流釣り紀行』 …… 15

JSRC 2012**年度理事会議事録** …… 16
JSRC 2012**年度総会議事録** …… 17
☆2011**年度 事業報告**　☆2011**年度活動計算書** …… 18
☆2012**年度事業計画**　☆2012**年度予算書** …… 19

事務所報告　☆新入会　☆会費　☆子犬登録　☆寄贈 …… 20

高速道路下の河港
(水彩) 五味画

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人　縄文柴犬研究センター

会事務所　**郵便振替口座**　02280-2-106951
〒　014-0073　**秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5**　TEL　0187-68-2976
http://www.jomon-shiba.com/　encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

栗駒山麓から全国のみなさまへ
7月7日の交流会にお越しください

宮城県　菅 原 俊 文

桜の開花が日々東北に北上し、秋田角館、青森弘前の満開が報道され、遅い春が到来したと感じられる季節になりましたが、会員皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

去る4月15日に、理事会・総会が終了いたしましたので報告申し上げます。今年度から、会誌の巻頭文は各地で分担して投稿することになりました。今回は、宮城県の担当となり、縄文柴犬が飼われている環境が理解できるのではないかと思っています。

私たちの地区は、宮城県内の北端にあり岩手・秋田の県境で、三年前の宮城・岩手内陸地震の震源地から10キロほどの栗駒山の麓、栗原市の文字地区です。震度７を経験し、4キロほど上流に荒砥沢ダムを有し、貯水量が三分の一程となって、更に右岸の崖が崩落、埋没した経験をし、昨年は東日本大震災、地震の日々でした。

その後、３年の月日を費やして、ようやく今年から当地区を通行し栗駒山まで行けるようになり、想像を絶するような崩落現場を目視できる展望台を設置しましたので、一度はお出かけ下さい。

私ごとですが、縄文柴犬との出会いは二年前、狩猟を始めて四十年弱でイノシシを初めて見ました。それからは毎日足跡を追いかける日々で、ようやく巻山を

連れてきた犬が縄文柴犬でした。

私はこれまでに、アイヌ犬、甲斐犬と和犬を飼って来ましたが、縄文柴犬が獣の足跡を追いかけている姿が、飼い主の行動に合わせて距離をとる様子を見ていて、今までの犬の習性とは違う感覚を覚えました。

先輩が、縄文柴犬の血統繁殖を考えていることを知り、昨年、その子犬を譲り受け、飼い始めました。その子犬も半年になり、今は性格を見極めようとしている毎日です。このほかにラブラドールレトリーバーも４年前から飼っており、当初、二匹はなかなか馴染めなくて、大変な日々でしたが、半年が経過した今は、頭を並べ食事をして、お互い食器に口を入れるようになってきた所です。投稿できる時期が来ましたら、また報告いたしたいと思っています。

交流会開催について、ご案内いたします。

日時= 平成２４年７月７日（土）　午前9時30分受け付け開始
場所= 宮城県栗原市栗駒文字加賀51-6（次頁略図参照）

実行委員長＝菅原俊文
総合司会＝菅原久喜

プログラム

午前９時３０分受付開始　（雨天決行）

第一部　10時開会式→記念撮影
10：30＝愛犬自慢（各自己紹介を兼ねて愛犬自慢）
11：30＝縄文柴犬について（総論）
12：00＝昼食　懇親会を兼ねて質疑応答…交流
（昼食各自持参･現地弁当注文も可）

第二部　午後３時から交流会及び理事会に移行します。

送迎のご希望は、事前に、電話などで現地・及び表記事務所と打ち合わせをしてください。
（現地電話、次ページ参照）

備考：同封の用紙に記入し､表記事務所宛に郵送して下さい。── 締め切り日：6月１５日必着 ──

〇参加・不参加に関わらず、愛犬の様子を知らせ下さい。（会誌掲載の場合もあります）。

〇準備の都合上、交流会に参加する方は必ず記入して下さい。

〇宿泊については(一人：9000円）、定員オーバーの場合、近くの民宿（会員宅）も準備中です。

注記：★雨具など各自用意して下さい。★犬は各自の管理責任です。★ご不明な点は表記まで問い合わせ下さい。

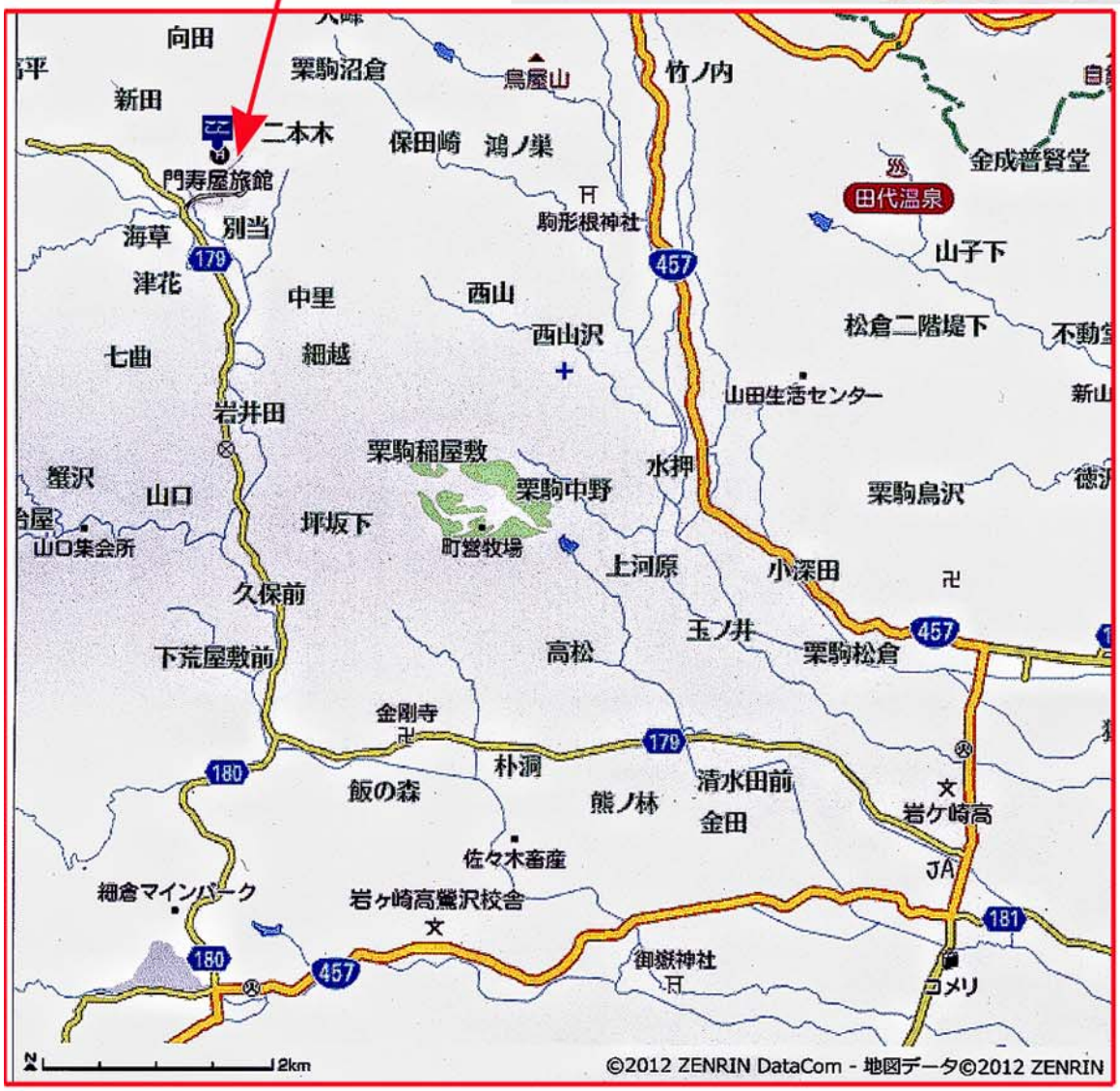
新幹線＝くりこま高原駅下車

東北道＝若柳・金成IC下車

もんじゅや
門寿屋旅館

☎0228-47-2024

〒989-5361
宮城県栗原市栗駒
文字加賀堂51-6
菅原俊文



特集　**『縄文柴犬ノート』を読んで**

尾 暮 正 義

前略

この著書は、五味さんの縄文柴犬作出に関する調査・研究と実践の集大成ともいうべきもので、忘れかけていた昔の事を思い出しながら、興味深く読ませていただきました。

私の郷里は新潟県の水田地帯にあり、子供の頃は多くの家で犬を飼っていましたが、洋犬は殆ど見当たらず、小型ないしは中型の日本犬(ほとんどが雑種と思われます)でした。そんなわけで、犬を飼う機会があれば柴犬をと考えていましたが、柴犬の良さを実感したのは東京の公務員宿舎(独立家屋)で実際に柴犬を飼った40年程前からです。

偶然、近くにお住まいの中城さんから、2頭の雌の子犬を譲り受け、「おとなしい」方の1頭は我が家で、「ヤンチャ」な方の1頭は新潟の実家で飼う事にしました。4・5カ月後に実家に帰った折に、生後7・8カ月になった「ヤンチャ」な子犬の様子を聞くと、「かわいくて」、「かわいくて」を連発していましたが、「不思議な犬」とも言っていました。そのわけを訊くと、毎朝檻から脱出して扉の前で尻尾を振って待っているというのです.檻は2m四方、高さ1.5m程の屋根付きで、犬が檻の外へ出られるはずが無いというのです。そこで、私はしばらくこの犬を観察した後で、犬用の骨のおもちゃを与えたところ、犬はしばらくじっと観察した後ちょこっと前足で骨に触ると同時に、体を水平に保ったまま2回、3回と連続で30cm前後跳び上がりました。その姿は以前テレビで見たキタキツネの跳びはねる姿と全く同じでした。驚くべき跳躍力を目の当たりにして、この犬が檻から脱出するわけが解りました。この跳躍力を利用して檻と屋根の隙間に跳びついて脱出していたようです。この可愛い犬の奇麗な体躯は、実はバランスのとれた骨格と強靭な筋肉によって出来上がっていたのです。(この犬は残念ながら、1回も出産すること無く、5歳で交通事故により死亡しました)。

一方、我が家で飼育していた「おとなしい」方の犬(名前はマリ)は、家族全員に忠実で、特に三男坊にやさしく(マリの2回目の出産後に誕生したので、マリは三男坊を自分の子供の様に思っているフシがあった)、何をされても怒りませんでした。他方では、塀の外で遊んでいる近所の子供達のカンシャク玉の音には怯えるし、雷が鳴るとパニックになりました。そんなわけで、家族には忠実で優しいが、弱虫で頼りにならない犬というレッテルが貼られていました。ある休日の午後、二歳半の三男坊とともにマリの散歩に出かけ、研究所の空き地で犬を放して遊んでいました。そこへ、私の同僚がマリより一回りも二回りも大きい雄犬を連れてやって来ました。すると、マリは三男坊を護るように周りをぐるぐる回り、更に雄犬が近づいて来ると、今まで見たことも無いような形相で猛然とその雄犬に跳びかかって行きました。これには皆びっくりしましたし、その雄犬も予期せぬ攻撃を受けて逃げ出しました。カンシャク玉や雷にはパニックをおこす頼りない「弱虫な犬」が、主人を護るためには身を挺して戦う姿を見せつけられすっかり見直しました。

そんなことから、人と犬とが生命を預け合って生きた厳しい狩猟生活の中から育成された猟犬・その血を引く柴犬を絶滅させないで、次世代に引き渡すことの重要性を痛感しました。なお、マリは数回の出産で20頭前後の子犬を残しましたが、私の職場が筑波研究学園都市へ移転することになり、つくばの公務員住宅(集合住宅)では犬、猫等が一切飼えないため、泣く泣く秋田県の猟師さんに引き取っていただきました。(マリを最後まで飼ってあげられなかった無念さと悲しみから、以来犬を全く飼えなくなりました)。

縄文時代には、厳しい生活環境に適応できない犬は自然淘汰され、犬の狩猟技術などでの優劣が人と犬の生命に関わるため、犬は飼い主の厳しい選択の対象になったと推測されます。そしてこの淘汰・選抜が一定の方向に行われたため、柴犬の重要な形質が均一化されて来たと考えられます。しかし、現在では縄文時代の犬達が経験した自然環境や生活環境の再現は不可能ですし、見本になる柴犬も現存しないので、縄文時代の柴犬を作出することは非常に難しい課題であったことは誰の目にも明らかです。

実は、私も30年近く作物の育種に携わって来ました。そこで明らかになったことは、育種目標をちょっと変えるだけで育成される品種の特性が大きく異なって来るということです。柴犬の場合でも、交配親や育種目標が変われば、少しずつ違った特徴を持つ犬が作出されるでしょう。そしてこれを何代も一定の方向で継続すれば、極端な話、タヌキに似た犬やクマに似た犬が出来上がるでしょう。従って、柴犬の育種方向を決めるために縄文時代の犬達の正しいイメージを確立する必要があったことは容易に推測されます。

今まで真剣に柴犬保存を推進して来られた人達は、このイメージ作りにあたり、それぞれの好みや成り行き任せではなく、過去の柴犬に関する文献をはじめ、縄文時代の犬の骨、ニホンオオカミの標本、野生動物

の額段の特徴等々を詳細に調査研究し、徐々に明らかにしながら、交配親の選定や作出された犬の評価に当たって来られたことが、五味さんの著書からよくわかります。これは、現存しない縄文時代の柴犬を再現するための唯一の正しい方法であったと思います。

数十年前の意識的に柴犬保存が開始される以前の小型日本犬は、多かれ少なかれ洋犬等他の犬種の血が混入していたり、劣悪な遺伝子が取り込まれていたことでしょう。従って、縄文時代の柴犬を再現するためには混入した異犬種の形質や劣悪な遺伝形質を除去する必要があります。

イネのような自家受粉をする植物では、6～7代にわたり自家受粉を繰り返すと、大抵の場合80%以上が遺伝的に同一な「純系」が得られ、更に自殖を繰り返せば、全部が純系の個体になります。動物の場合でも、近親交配を繰り返せば、理論的には遺伝的に均一な個体が得られることになりますが、例えば蚕の場合などは2～3代の近親交配で生物的機能が極端に劣化します。野生動物の中には1頭のボスが近縁関係にあるグループを引き連れ、近親交配が行われている例も少なくありませんが、厳しい生存競争やボスの交代などで、近親交配の害を除くよう調節されているようです。柴犬の場合、劣悪な遺伝子を除去しながら優良遺伝子を蓄積するために適切な近親交配が必要不可欠であり、縄文柴犬の作出においては育成者のたゆまぬ研究と努力により優秀な交配親の選定と計画的で適正な交配組み合わせが行われていることが実績によって示されています。

育種においては、育成者の経験、知識の蓄積、先見性などが不可欠ですが、優秀な縄文柴犬の継続的な保存のためには、いろんな形質の数値化も有効と思います。例えば、額の広さ、後頭部の発達、額段の深さ、口吻部の太さ、胸の広さ、深さなどの重要形質を何らかのかたちで客観的に表示できれば、大勢の人が参加した時に今後の縄文柴犬の作出方向におけるブレが少なくなると恩われます。

一方、昔から「育種は芸術だ」といわれております。私はこの言葉は科学的、客観的な手法の軽視につながるようであまり好きではありませんが、いろんな形質の中にはお互いに相反するもの、両立しないものなどがあり、実際の育種では数値よりも育種家の感覚に頼らざるを得ない場合があることも事実です。肝心なことはそれぞれの数値のあらわす意味と重要性を正しく認識した上で活用することであると思います。この点で興味深いのは、柴犬の「体高」や「耳のたれ」であり、重要な知見だと思います。

いずれにしても、五味さんの縄文柴犬の保存方法、考え方に私は全面的に賛成です。中でも五味さんの一番の達観は「柴犬は特定の個人や団体の私有物ではない」という考え方だと思います。加えて、柴犬に対する限りない愛情に感銘を受けました。これは、縄文柴犬保存の原則だと思います。私の場合、品種育成に駆り立てた背景にあったものは、公務員としての責務と研究者としての探究心、更には少なからぬ功名心であって、五味さんの心境にはほど遠いものでありました。

最後に、私が危惧する今後の問題を述べさせていただきます。保存活動が、例えば絶滅危慎種の鳥類や動物を人工繁殖して自然に返すような場合にはあまり問題は無いでしょうし、縄文柴犬保存の場合でも作出された犬を縄文時代と同一の自然環境、生育環境の下へ戻すのであればほとんど問題はないでしょう。ところが、縄文柴犬は、一般家庭でペットとして、或は番犬として飼われることになるところに、いくつかの問題が生じてくる可能性があると思います。例えば、郵便配達員等飼育者以外の知らない人に噛み付いたり、散歩中に他の犬を襲ったりすると大きな問題になります。このようなことから、縄文柴犬の気質や風貌を失っても、可愛くて人懐っこい犬の作出方向が主張されることも起こりうると思います。縄文柴犬の本質的な気質や風貌を失わず、しかも現代社会の中で他の人や犬に友好的な性質を保持することは今後とも重要であると思います。更に、縄文時代には当たり前であった厳しい自然淘汰や人為選抜が現代社会では無いため、虚弱で劣悪な犬であっても飼育され、見た目だけの「優秀さ」が追求される危険性を孕んでいると思います。その他、過度の近親交配による劣悪遺伝子の蓄積を回避するための管理も重要と思います。

これらの問題を解決できるのは、やっぱり「柴犬は特定の個人や団体の私有物ではない」という思想と、犬への愛情でしょう。

力作の著書に触発されて、色々つまらないことを書き連ねてしまい、失礼しました。五味さんが頑張っておられる限り、縄文柴犬の未来も安泰と思います。私には何もできませんが、心から応援しています。

どうも有り難うございました。一層のご活躍を祈念致します。　　敬　具

2012年4月10日

シバの散歩道 (14)

犬猫看板観光旅行記　その4

根深　誠
(文筆家・釣り師・元登山家)

姫路市の並木の大通は「日本の道100選」に入っている。ちなみにわが津軽地方では、黒石市の「中町こみせ通り」が一件入っている。「こみせ」は津軽地方の呼び名だが、越後地方など積雪地帯の町家に見られ、軒先から庇を長く張り出し、その下を通路にして冬季も人々が通行できるようにしたもので、越後地方では「雁木」と呼ぶ。

それにしても姫路市の並木は立派である。葉が繁っていたら、さぞや、見ごたえがあるだろうと想像しながら歩いた。雨上がりの曇り空から薄日が射し、行く手正面に広々とした姫路公園が見えたとき、威容というか、その整然とした佇まいに感激した。幅広い通りをへだてて大手門と向き合いながら、おそらく相当に街並の美観を意識した町づくりがされているのだろうと思った。通りすがりの観光客の私に、そのような印象を植えつけるのは、おそらく無意識裡にわが故郷の町と比較してのことだろう。

以前私は、新聞社の姫路支局の記者から姫路公園には、弘前市役所で設置しているような「禁止」の立看板などなく、市民が飼犬といっしょに自由に散歩していることを聞かされていた。国宝であり、世界遺産の物件になっている大天守にも入れるという。

それで機会があったら自分の目で確認したいと思っていたのだ。わが弘前では「弘前公園は国指定の史跡なのだから犬猫をつれて散歩などとはもっての他」という人たちがいる。しかし時代錯誤も甚だしい、という

犬といっしょに修理工事中の天守を眺める散歩者。

か、夜郎自大に陥っているとしか思えない。それがまた弘前周辺の人たちの性向であり社会風土でもあるのだが。ところが、そこに胡坐をかいて因循姑息に甘んじているのが行政である。犬猫看板やゴルフの打球にかかわる問題を見ているかぎり、そうとしか考えられない。

大天守は修理工事中だった。巨大な覆いに包まれて実物を見ることはできなかったが、もし仰ぎ見ることができれば驚嘆したにちがいない。覆いの壁面には、パンフレットによると「存在感をアピール」するため、実物大の線画が描かれていた。しかし、サービス精神は理解できるとしても、実物とは異なり、それだけでは存在感があるはずもない。

私は大手門から姫路公園に入った。すぐに三の丸広場がある。正面の姫山に工事中の大天守が見える。左手の「千姫ぼたん園」の入口付近にネコが数匹たむろしていた。犬をつれた散歩者を何組か見かける。

「こんにちは、写真を撮らせてくださいね。なんという種類の犬ですか」

黙って撮るのは相手に失礼だから、まぢかに撮るときは、こう言ってカメラを向ける。飼犬がそっぽを向くと飼主は、こっちこっちを向くのよ、と飼犬に話し

公園内を毎朝毎夕散歩しているというオバサン

かけ、私に協力的である。一度だけ盛岡でネコをつれた中年女性が、お願い、許して、勘弁して、と言いながら駆け去ったことがあった。これには私も面食らった。そんなに悪いことでもしたのだろうか、と折檻でも加えたような錯覚に陥る。もしかしたら誤解されたのかもしれない。　サクラの花びらが歩道に散り、姫路公園内には、フンの持ち帰りや、リードを放して遊ばせないように、という、飼犬をつれた散歩者に注意を呼びかけるような看板さえ設置されていない。だからといって、フンを放置してもいいというわけでもないだろう。散歩者が手に袋を持っていたことからしてマナーは守られているのである。

しかし、先ほど見かけたネコはどこかでフンをしているはずである。いちいち、こうしたことを係員にたずねるのも気が引けた。勝手な想像なのだが、清掃の係員がかたづけているのだろうと思う。

姫路城の大天守へ行くには、歩道の先にある有料のゲイトをくぐらなければならない。入場券を買うとき係員に、ペットをつれて中に入ることについてたずねてみた。

「大丈夫ですよ」

と拍子抜けするような、あっさりした言葉が返ってくる。それがどうかしましたか、と言わんばかりの不審な表情をするので、私は弘前の事情を話した。ところが、若い女性だったが、「弘前」と聞いてもピンとはこなかったらしい。思案顔で空を仰いだ。天下の姫路城にくらべたら三百諸侯の一外様大名の弘前城など有象無象の類である。それもそうだろう、私にはサクラだお城だと言って、「日本一」だと御国自慢にうつつを抜かすわが故郷の人たちが哀れなほど愚かに思わ

ネコがのんびりたむろしている。

公園管理事務所にはケージが用意されている。

れた。

「サクラとリンゴで知られる、青森県の津軽地方にある町なんですが」

係員の女性は、そんなことにはまったく頓着ないといった様子で、

「ペットを嫌いな方もいますし、リードをつけて天守内を歩くと他の見学者の邪魔にもなりかねませんので抱いてもらったり、ケージに入れてもらったりしています」

と説明した。

「ペットは入場料を取られるんですか」

係員は、そんなことはありません、無料ですよ、と笑い声を上げて答えた。思わず吹き出してしまったような、その笑い声から想像すれば予想外の、ずいぶん、おかしな質問だったようだ。

「ケージはどこにあるんですか、見せていただけますか」

係員は、管理事務所の前に置いてあります、と言って、私を案内しながら、

「博物館が向こうにあるんですが、ペットの入館はお断りしています」

と教えてくれた。

私はそれを聞いて、もしかしたらペットをつれて博物館や美術館を見学に行く奇抜な人も世の中にはいるのかもしれないと思い、不思議な世界を垣間見たような気分になった。

それにしても、みなさん一様に親切である。本来なら、これが接客マナーであり、当然なのかもしれない。

姫路公園を出て、さて、どうしようか、と逡巡した。姫路に泊まろうか、大阪まで足を延ばすか。明日、西ノ宮で、世話になっている年上の友人と昼食の約束があった。それに大阪城公園も散策したい。

ということで夜、大阪駅に着いた。さすが大都会であり、人が多いこともさることながら、駅の構内で走る乗客が目につく。東京でも同様だが、走ったぶん時間を短縮できるかというとそうでもない。要するに、都会人の都会での生活スタイルなのではあるまいか。田舎の駅では走ることもないだろうし、海外の空港や駅で走る日本人旅行者を見かけたこともない。旅行者は帰国して空港に降り立ったとたんに「走る日本人」に戻るらしく、税関のカウンターへ向かって、土産品を山と積んだカートを押して駆け出す旅行者はけっこういる。

大阪駅構内で、ここいらに観光案内所はありませんかと駅員にたずねた。六時で終わりだという。駅の正面の奥まった暗がりに、ビジネスホテルのネオンサインが見えたので、公衆電話の電話帳で電話番号を探し出し、電話をかけ、料金を確認して予約を入れた。徒歩で十分ほどかかった。フロントにはチェックインする何組かの外人客がいてインド人の夫婦も混じっていた。インドやネパールは私には馴染みが深いので一目でわかる。エレベーターに乗り合わせたのでたずねると、やはりそうだった。観光に来たのだという。